

# ミサワクラス+アジアハウス 2009年10月8日[木]→15日[木] OPEN

不動産のセレクトショップとして、新しい視点での物件活用の提案をおこなっている『東京R不動産』の山形版『山形R不動産リミテッド』が、このたび山形市の中心街に、東北芸術工科大学出身の若手アーティストとアート系学生のためのシェア・アパートメントを設立しました。古い旅館をリノベーションした『ミサワクラス(旧三沢旅館)』には、現在11人の若手クリエイターがユニークな共同生活=制作をおこなっています。建築・グラフィック・クラフト・絵画などのハイブリットのアートプロジェクトを標榜する彼らが、この秋、『山形国際ドキュメンタリー映画祭2009』と連携したアートワークを発表。さらに、近隣の空きビルにスペースを拡張し、アジアの映画関係者のための仮設ドミトリーや交流カフェ、スタジオなどの機能を備えた複合ビル「アジアハウス」を、8日間限定でオープンさせます。

アジアハウス「山形国際ドキュメンタリー映画祭2009 連携プログラム」

## 連続レクチャー「再生のスタンス」

インターローカルな知的交流を生み出すことを目的に設立されたアジアハウスでは、山形国際ドキュメンタリー映画祭の期間中、6夜連続のレクチャーシリーズを開講します。映画、アート、建築、民俗学など、幅広い分野で活躍する講師陣が、「再生」をテーマに、それぞれの思索の現場を熱く語ります。

【第1夜】10月9日[金] 18:30～20:30

対談：馬場正尊(東京R不動産/建築家)×阿部公和(「亀や」代表取締役社長)  
「生まれた街を、好きな街にかえていくために」



馬場正尊 | Masataka Baba

佐賀県出身。早稲田大学大学院建築学科修了。博報堂、早稲田大学博士課程、雑誌「A」編集長を経て、2002年Open Aを設立し建築設計、都市計画、執筆などを行う。主な作品として、運河沿いの倉庫をオフィスに改造した「勝ちどき THE NATURAL SHOE STORE オフィス&ストック」(2007年)。オフィスを集住宅に改造した「門前仲町のオフィスコンバージョン」(2005年)。「東日本橋のオフィスコンバージョン」(2004年)。茨城県守谷市に「郊外の小さな農家」をテーマにした住宅を設計、日本橋コレドの公開空地のリ・デザインなど。著書に「R the Transformers / 都市をリサイクル」。「POST-OFFICE / ワークスペース改造計画」。「東京R不動産」など。  
東京R不動産= <http://www.realtokyostate.co.jp/open>  
A= <http://www.open-a.co.jp/>



阿部公和 | Kimikazu Abe

山形県鶴岡市出身。湯野浜温泉「亀や」「湯どの庵」代表取締役社長。和食店「阿部」主人。早稲田大学社会学部卒業。岩木一二三に師事。平成5年に「亀や」(明治6年創業)入社し、2009年に6代目として家業を継ぐ。コミュニティを提案する新しいタイプの宿として「湯どの庵」を、家具デザイナーの岩倉榮利、アートディレクターの水野学らのデザイン監修により増築。2006年には東京に正しい日本の食事の提案をおこなう和食店「阿部」(赤坂)を出店し、ミシュランガイド東京で2年連続星を獲得。また、2009年には山形の食材だけを使用するカフェ兼定食屋「フクモリ any-cafe」(馬場町)を、山形県内の若手旅館経営者のグループ事業(THKコミュニケーションズ)としてオープンさせた。  
亀や= <http://www.kameya-net.com/>  
フクモリ= <http://fuku-mori.jp/>

【第2夜】10月10日[土] 18:30～20:30

講演：スーザン・モーグル(映画監督/アメリカ)

「個人史を赤裸々に映画化する」



スーザン・モーグル | Susan Mogul

1949年ニューヨーク市生まれ。ロサンゼルス在住。自伝ドキュメンタリー、民族誌学を自由に組み合わせ、日々の生活からドラマティックで詩的な物語を紡ぎ出してきた。公私にわたる女性の生き方を描く。1970年代初頭からビデオ制作に携わり、この分野のパイオニア的存在となる。グッゲンハイム・フェローシップを受賞後、その作品はアメリカ内外の映画祭、美術館、アートギャラリー、公共テレビで発表されている。ビデオ作品はゲッティ美術館の画期的な「カリフォルニア・ビデオ」展やパリのボンビトゥー・センター、ニューヨーク近代美術館で展示される。2009年、ニヨン国際映画祭ヴィジョン・デュ・ワールドで初の回顧展が開かれる。2009年11月には、ロサンゼルスのアートギャラリー Jancar でフォトコラージュ作品の個展が予定されている。

【第3夜】10月11日[日] 18:30～20:30

講演：アマル・カンワル(映画監督/インド) 聞き手：小川直人(logue/せんたいメディアテーク)

「インスタレーション企画からビルマの民主化運動とアートを考える」



アマル・カンワル | Amar Kanwar

1964年生まれ。居住地であるニューデリーで活動中。エドヴァルド・ムンク現代芸術賞(ノルウェー)受賞者であるカンワルは、インド亜大陸の政治・社会・経済・環境状況を、その詩的かつ思索的な映画で探究している。インド・パキスタン国境における暴力と非暴力の問題を検討し、YIDFF'99でも上映された「外部の季節」(1997)は、ムンバイ国際映画祭でゴールデン・コンチ賞を、サンフランシスコ国際映画祭でゴールデン・ゲート賞を受賞。YIDFF2003で上映された「予言の夜」(2002)は現代インドの詩を、「Torn First Pages」(2003-08)は現代ビルマ状況を探究。その映画作品は、アムステルダム・ステイライク美術館、ニューヨーク近代美術館、オスロ国立美術館などの美術館で、特別展示の対象にもなっている。ドイツのカッセルで行なわれた、ドクメンタ11(2002)とドクメンタ12(2007)にも参加した。

【第4夜】10月12日[月・祝] 18:30～20:30

座談会：赤坂憲雄(東北文化論)×渡辺智史(映画監督)×肘折地区青年団  
「映画『湯の里ひじおりに』を見る、若者たちのいま」



赤坂憲雄 | Norio Akasaka

東京都生まれ。民俗学者。東京大学文学部卒業。専門分野は東北文化論。山形。さらには東北一円をフィールドとして、みずからの足で歩き、みずからの目で見、みずからの耳で聞く作業を続けている。東北の小さな民の具体的な歴史を掘り起こし、歴史以前の闇のなかに埋もれた(もうひとつの東北を)浮き彫りにしながら、東北学の構築をめざしている。主な著書に「異人論序説」(砂子屋書房)、「遠野 物語考」(宝島社)、「柳田国男の読み方」(ちくま新書)、「東北学へ」3部作(作品社)、「山野河海まんだら」(筑摩書房)などがある。2007年「岡本太郎の見た日本」(岩波書店)でドゥマゴ文学賞を受賞。2008年には同書で芸術選奨文部科学大臣賞受賞。現在、東北芸術工科大学大学院、同大学東北文化研究センター所長。



渡辺智史 | Satoshi Watanabe

山形県鶴岡市出身。東北芸術工科大学で建築を学ぶ傍ら、東北文化研究センターの民俗映像制作に参加。2002年「関川しな織り」の撮影を担当、03年山形県村山市の茅葺集落五沢の1年を追う。上京後、イメージフォーラム附属映像研究所に通い、その後、飯塚俊男に師事しアムールに入社。2006年障がい者が参加する第九合唱を描いた「An Die Freude 歓喜を歌う」で撮影・編集。2007年「映画の都 たまたま」を撮影し、その後、フリーで映像制作に従事。山形県大蔵村にある肘折温泉を巡ったドキュメンタリー映画「湯の里ひじおりに」学校のある最後の1年」では初監督を務め、作品は現在日本各地で上映中。  
「湯の里ひじおりに」を支援するブログ  
<http://hijorieiga.blog.shinobi.jp/>

【第5夜】10月13日[火] 18:30～20:30

講演：北川フラム(アートディレクター/越後妻有アートトリエンナーレ総合ディレクター)

「インターローカルな芸術祭が社会に与えるインパクトについて」



北川フラム | Fulam Kitagawa

新潟県高田市(現上越市)出身。株式会社アートフロントギャラリー代表。東京芸術大学美術学部卒業後、アートディレクターとして国内外の美術展、企画展、芸術祭を多数プロデュースする。1997年より越後妻有アートネットワーク整備構想に携わり、2000年から開催されている「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」では総合ディレクターを務める。2007年に新潟市美術館館長に就任。主な役職は、財団法人直島福武美術館財団常務理事、アメリカ合衆国ロサンティ財団理事、地中美術館総合ディレクター、東京都現代美術館美術資料収集委員、「水都大阪2009」プロデューサー、「瀬戸内国際芸術祭2010」総合ディレクター。2006年度芸術選奨文部科学大臣賞(芸術振興部門)受賞。

【第6夜】10月14日[水] 21:30～23:00

「アジアハウスの打ち上げセレモニー」

キドラット・タヒミック(映像作家/フィリピン)を迎えて」



キドラット・タヒミック | Kidlat Tahimik

会場：アジアハウス地下スタジオ 定員：各回50名 参加費：各回500円(1ドリンク制) 企画：藤岡朝子+宮本武典 主催：東北芸術工科大学 お申し込み：申し込みがなくとも聴講可能ですが、席に限りがありますので、事前予約を希望される方は、E-mailまたはファックスにて、プログラム名「再生のスタンス」を明記の上、必要事項(参加希望回/郵便番号/住所/氏名/電話番号/FAX番号/E-mail)を添えてお申し込みください。申し込み受付完了連絡をE-mailまたはファックスで送付いたしますので、連絡受領後、参加受付完了とさせていただきます。なお、定員になり次第、受付を締め切らせていただきます。お問い合わせ：東北芸術工科大学美術館大学センター「再生のスタンス」申込係 Tel: 023-627-2091 Fax: 023-627-2308 E-mail: [museum@aga.tuad.ac.jp](mailto:museum@aga.tuad.ac.jp)

## アジアハウスドミトリー

世界中からやってくる海外の映画フリークのために、アジアハウスの3フロアをドミトリー(相部屋)として提供するプロジェクト。簡素な室内に運搬用の木製パレットで組まれたベッドが点在し、国境を越えた移動と交流を象徴する。また、館内には多数のアート作品を展示。期間中、宿泊者以外も見学できる。



会場：アジアハウス2F+3F+4F 公開時間：15:00～17:30

## Café Espresso 2009

小川町にある名物カフェ「Café Espresso」がアジアハウスの1階に期間限定で出店。カフェの客席として、惜しまれつつも閉館となった七日町の映画館「シネマ旭」のレトロな座席を移設する。映画漫げの一週間、幕間に濃厚なエスプレッソを味わいたい。空間構成はミサワクラスが担当。



会場：アジアハウス1F 営業時間：10:00～20:30